

Mrs. Craddock について

—Miss Ley を中心として—

佐 藤 匡

I

“Mrs. Craddock”(1902) は, “Liza of Lambeth”(1897), “The Making of a Saint” (1898), 短篇集 “Orientations” (1899), “The Hero” (1901), のつぎ, 第五番目の作品である。しかし, この作品は, 1900年にかかれており, “The Hero”の前であり, Heinemann の選集に初期の作品から “Liza” について入れている所から見ると, モームの第二作と見なされてもさしつかえないようである。R. T. Stott も, 初期の作品中で, 現在でも読むにたえるのは『ライザ』については, この作品だけであると言っており, P. Dottin 氏も, 『ライザ』に類似点あり, その延長線上にあると論じている。⁽¹⁾

“The Making of a Saint”『或聖者の半生』は, Andrew Lang の小説作法の文章を読み, 同時代の風俗習慣を書ける程, 人生の経験を積んでいない若い作家に, 歴史は物語や人物を提供し, 若いロマンティックな情熱に訴え, 歴史小説を書くに必要な気力を与えるであろう。歴史小説これこそ若い作家の書いて成功し得る唯一の小説だという意見に共鳴し, 感心し, マキャヴェリの『フロレンス史』を読み, 文献をさぐり, 夏カプリ島に行き, 毎朝六時に起き, 懸命に書きあげたものであった。暴君あり, 陰謀あり, 美男美女あり剣戟あり恋愛ありで, まことに賑やかだが, それだけのものだそうである。尚, モームはこのラングの意見は誤りであったとし, 小説家は, 思索や, 生活⁽³⁾の変転によって, 世の中の知識を得, また周囲の人々の個性を永年探究し, 人間の本性をえ

ぐり出す直観を獲得し、過去の時代の人物を理解し、それによって再現出来るようになる晩年になつてからこそ歴史小説に向うべきであるとのべている。又“Orientations”『指針』は、⁽⁴⁾“The Punctiliousness of Don Sebastian”, “A Bad Example”, “De Amicitia”, “Faith”, “The Choice of Amyntas”, “Daisy”, を集めた短篇集である。これに対して、若さ故の傲慢さが最大の欠陥で、自分の氣むづかしく狭い量見にさからうものは悉く嘲笑しているのが鼻もちにならないと感想をもらしている。しかし、次のような巻頭のアフオリズム⁽⁵⁾を読むと、この感想も相殺される程の若いモームの作家としての構えを推察することが出来る。

C'est surtout par les nouvelles d'un jeune écrivain qu'on peut se rendre compte du tour de son esprit. Il y cherche la voie qui lui est propre dans une série d'essais de genre et de style différents, qui sont comme des orientations pour trouver son moi littéraire.

(主として若い作家の小説を通して、人は自己の精神傾向を理解することが出来る。若い作家は、彼の作品の中で、一連の相異なるジャンルとスタイルの試みの中から自分に適当した途を求めている。それらの試みは、人が自分の文学的自我を発見する為の指針のようなものである。) (田中西二郎氏：短篇小説「モーム研究」新潮社)

自作が、如何に未熟であり、習作めいたものであろうと、それ相応の存在理由はあるのだという、文壇に雄飛せんとする、氣負った若いモームをよくあらわしており、単なる通俗の作家とは異なる所があるという意気を示すものであった。しかも、初期のモーム——“Of Human Bondage” (1915) 前迄の頃——にとっては、すべてが、職業作家としての成功への足組、実地練習であると自覚していたのである。読者に阿ゆする気など毛頭なかったようである。自己目的な場を設定せず、読者の興味を引き寄せて行くような場の背景に隠れ、表現の完成に努力した作家であるといふ得る。単に読者を amuse させようとはせず、enlighten しようとした作家でもある。Be not deceived, gentle reader, no self-respecting writer cares a twopenny damn for you. (読者よ、だま

れないようにせよ。自信のある作家は、読者のことなど念頭におかぬものだ。⁽⁶⁾とは本作品中の作家の告白である。彼の文学観の根柢には、読者に喜びを与えることが原則として横たわっているが、その為に作家の自我を殺すことはしなかったようである。シニカルとか、ブルータルとか、腕達者とかいわれているが、それには侮蔑がこめられているのだろうが、同時に、モームの持味が、作品にあらわれている証拠でもあろう。

註

- (1) R. T. Stott, *The Writing of W. S. Maugham*, Appendix 4, P. 124.
- (2) P. Dottin, *Somerset Maugham et Ses Romans*, P. 38.
- (3) 上田勤, 『モーム』 P. 44.
- (4) *The Summing Up*, XLIV.
- (5) Preface to *The Trembling of a Leaf* (The Collected Edition).
- (6) *Mrs. Craddock*, P. 259.

II

『クラドック夫人』に至る迄、その題材は皆異なり、カメレオンのモームを示しているが、処女作『ライザ』とは、前にも、一寸ふれたが、色々、類似点があり、一つの sequence をなしていることが分る。『ライザ』では、年はいかない小娘ライザが、中年男に衝動的な愛を感じ、世間の冷たい目をあびながら、遂に不慮の死にあい、はかなくも彼女の恋は散って行くが、『クラドック夫人』では、女主人公 Bertha Ley もライザと同じく衝動的な、肉にひかれる恋愛から始まり、以後障碍を押し切って結婚に入り、結婚中の愛情の起伏、衰え、死滅の過程を細かに心理分析的に描いている。『ライザ』の場面は貧民窟であるが、この場合は、1890—1900年代の英国の片隅の生活で、時代は一時代の終りであり、旧勢力が新興勢力によってとって代られようとしている時である。理想主義に脊を向けて、貧民窟で赤裸々な人々を見て快哉を呼んだモームは、こゝでも、既に彼等の使途もなく、自然に消滅すべき運命にあり乍らそれに気づかず、過去の泰平の夢をむさぼろうとする地主連中や、因襲のみなざる周囲に、ロマンティックなバーサ、イロニカルな Miss Ley を登場させ

て、彼等の仮面をはぎ取ろうとするのである。『ライザ』に於ても、貧民窟の人々の割合、自由な生活の中にも、何か世間態にかゝずらっているその弱点をついたが、こゝでは更にそれ以上の痛烈な暴露批判をあびせている。

III

この小説の第一頁に於て、モームは、この小説のタイトルは“The Triumph of Love”『愛の勝利』としてもよからうといっているが、一人の女が、理想の愛をかゝげ、（元来、肉欲的だが、彼女は恋を恋するといったロマンティックな心情の持主であった）、それに翻弄され、あげくの果にその恋に敗れ、孤独に沈むこととすれば、愛が一人の女性を征服したことになるであろう。又、業火にも似た愛を経験して、それに敗れて魂が浄化され、新しい人生観に目ざめほのぼのとした幸福感を得たことは、愛の勝利に帰するであろうというこれらの理由は、あまりにも逆説的で納得させられない。バーサの火のような愛情がクラドックのてごたえない態度に、愛は嫌悪となり、最後に無関心になるその推移から見れば、明らかに P. Dottin 氏、K. G. Pfeiffer 氏のいわれる “Naisance et Mort de l'Amour”, “The Death of Love” のテーマではなからうか。ロマンティックな生活態度の妻バーサ⁽¹⁾——彼女にとって愛することは、火となって燃えることであり、その他の生活をすべてその火焰の中に投入して了うことであり——、リアリスティックな生活態度のエドワード——愛情とは神の摂理による便宜のかつ必然的な慣習であり、衣服を注文すると同じ様に、なにも興奮して、大騒ぎする必要のない、いとなみであった——との戦いで結局は、リアリスティックな夫の生活態度が勝ったということも明々白々のことで、リアリズムの勝利はモーム自身の得意とする命題ではないか。

註

(1) P. Dottin, *Somerset Maugham et Ses Romans*, P. 48.

(2) K. G. Pfeiffer, *Somerset Maugham* P. 41.

IV

K. G. Pfeiffer 氏は、『クラドック夫人』はあきらかに、モームの伝記的作品であつて、主要な人物、Bertha と Miss Ley とは、モームの二面をあらわしているといっている。即ち、バーサは、自分の積極的な愛し方に、しかるべき反応を示さない相手をにくむという、情熱的で感じ易い面を、ミス・リイは自分を含めて誰も彼も、無価値で不合理な存在であることを見抜いている皮肉、懷疑な面を夫々あらわしているのである。当時のモームの逆説的な態度は、⁽¹⁾“A Writer's Notebook”で明らかのように、痛烈なものであり、ミス・リイにそのはけ口を見出したことは当然のように感じられる。バーサがロマンティズム、エドワードがリアリズムを代弁するとすれば、彼女はシニズムのにな手である。“Mrs. Craddock” (The Collected Edition) の序文によれば、作品中のモデルは全部彼の知っている人々であったが、この Miss Ley だけは、例外で、ナポリの博物館の Agrippina の彫像にもとずいたといっている。ミス・リイの容貌は、口が一番特徴的で、大きな口ではなく、両唇が少し薄すぎ口もとは、いつも、しっかりと結ばれて、いかにも意志の堅固らしい印象を与え、口の端のあたりには、表情のゆたかな動きが見えていて、彼女の口もと以外の所から受ける印象とは妙に矛盾した感じを人に与えている。彼女は、冷たい目つきで、人を見つめる癖があつて、人々を少なからず当惑させるのだと描写されているがそういった特徴が、日頃彼が吐露したい気持ちを托すのにふさわしいものだと心にきざみつけられたものであろうか。彼女は、作家の一視点として、物語りの展開を御し、彼女の得意の人間分析のメスをふるうのである。Miss Ley は、人間は愚かな存在であることから痛罵の錚を向けて行く。人間の愚かなことは鶏のようなものだし、涙を流すことは愚かしいこと、たとえ、器量の良い人でも、泣き出したら二目と見られず、不器量な女だったらぞっとする程いやらしいという。恋し合う男女の姿は出来るだけ人目につかぬようにせねばならぬ。愚かな人間のいとなむ慣習とか、行事にも毒づいて行く。さまざま感傷にみちた心を人に対して抱き、すべての隣人に胸襟を開くクリスマスは

彼女に取って不愉快でならぬ。夏でも、柵の木を見ると、中流階級の家々の飾りつけや、ガス燈のシャンデリヤがぶら下げられた、ヤドリ木や、行きあたりぼったりと女とキスすることを嬉しがっている、おろかな老紳士のことなどをすぐ思い出してしまう。成人式などの祝いのお祭り騒ぎなどは好ましく思えない。昔気質の英国人らしく、祝辞をのべ、祝福を捧げられることは、こっけいさと、厳肅さと感傷をつきまぜたようで、彼女にとっては聞くにたえないものである。姪の誕生日について、一言言わねばならぬことが、煩わしくてならない。「女は二十五を過ぎると、自分の誕生日を何か不謹慎なことでもあるかのようにやりすごす。所が、男は自分が、この世に生れ出たことをとても賢明だと思ひこんでいるので、誕生の記念日というものに関心を持つんだ。そして、その馬鹿な男達は、他人も自分と同じように関心を持っていると考えているんだ」と独語する。彼女の考えているまともな人類とは、大部分が、人の世話にならず自立し得るだけの資産を持つ中年女性であり、大陸を旅行したり、高雅な文学を愛読したり、世間のあらかたの人を嫌悪し、とりわけ、博愛主義的な金切声を上げて、宗教を押し売りしたり、押しつけがましい熱心さで奮励努力したりするのを一番やり切れないとする人々なのである。結婚は、離婚裁判所の判事のする仕事を作ってやる制度だとし、自活し得るだけの資力を持っている女性が結婚したがる愚の骨頂をとき、結婚なんて、十中八九は、不満足であり家柄が古いなどは問題にならない、問題になるのは、家門を断絶するよりは、一家を創始する人の方が好ましいと、現実的であり、改革的である。支配階級を輕蔑して、主人一族よりは、召使たちの方が、数等いやらしさがなくて感じがよいと断ずる。そして、厳しい態度で、結婚の本質論を展開する。結婚などというものは、一か八かの冒険で、情熱あってこそ、それをする価値が認められる。結婚を神聖視し、靈的な結びつきと考え、女としては、夫を愛し、尊敬しその意志に服従し、夫を助け支えて、やがて訪れる死を迎える用意が出来ていような生活を夫と共にいとなむとする、今迄の結婚観に真向から反対し、結婚本来の理由は、生殖本能であるときめつけ、女の与えられた特別の働きは、その種族を生みふやすことである、私の姪は、雄にひかれる雌だと、むごたら

しくも言い放つ。この考え方は、モーモには根強いものであり、恋愛は生殖線からうみ出される分泌物のもたらすものであり、極めて動物的慾求であるとする意見と共に、医学校生活から得られたものに相違あるまい。1894年の頃、『作家の手帖』に彼は次のようなことを書きとめている。産婦人科教授の言葉として。

Gentlemen, woman is an animal that micturates once a day, defecates once a week, menstruates once a month, parturates once a year and copulates whenever she has the opportunity.

(3)
彼女の心には、偏向がなく、常に問題の両面を明確に眺めて、そのどちらにも加担することがない。当然、同性の愚かさにも目をつむっては居られない。(この作品は、モームの女性蔑視を示す最初の作品であろう。)女性というものは、四十八などという年齢はみとめようとしない、四十五才だといつわる、オールドミスの慰めは死んでしまったり、或は他の女と結婚してしまった恋人を30年間もこいこがれていると他人にいうことだとして、人間性の欠陥をつこうとしている。四十才以下の女は例外なく共に語るに足らず、又、BerthaとGeraldとの関係を知っては、ほんの五分間でも、たとえ七十の老婆も、十四の少年と一緒にしておくわけにはいかないと反省し、Geraldの立つ日に、バーサがいらないのに気づき、さては、かけおちかと考え、バーサに限ってそんなことをする馬鹿とは思わないが、女は馬鹿げたことの出来る動物だとすると、いつだってやりかねないと心配する。バーサとエドワードとの結婚の幸福の所在について示す、Miss Glover, Dr. Ramsayらの皮相な観察によって判断を下す視野の狭さ、独断、愚鈍さもいかにく狙上のにせている。しかし、このように、一方的に冷笑をあびせる中年女性の姿だけをモームは描かない。ミス・リイは自分自身の理論を絶対的に信じこんで、その理論を嘲笑したりすることの出来ないタイプの女ではない。バーサと共に、大陸を旅行して、教会や、絵画や、都会を沢山見てくるが、その感銘を相共にかくし、感動的な場面に接しても、ミス・リイは感情をあらわすことを恥辱と思い、泣くまいとして笑い、感傷をおおいかくす為に、しばしば上品な皮肉を用いたのであるが、その態

度は、彼女の独創ではなく、J. Grimaldi の演技の焼直してであったと、その自分の態度を、心中、嘲笑するのであった。バーサとエドワードとが結婚し、ハネ・ムーン中にミス・リイは、Court Leys を去るべく用意をし、バーサの滞在するようにとの願いをことわって、私が、私という人間をよく見きわめているから、そのすゝめを私が受け入れることが出来ないのはよくお分りであろう、私はとりわけ、自己否定の癖の強い女であるから、ほどほどの収入を持った独身女が住むように運命づけられている、イタリアの安ホテルの人生に身を投げ入れることにする。そして、私は他の人達程、馬鹿ではないと考えたくなった時、ベデカの赤い表紙を見て、自分も、たかが一人の人間であることを思い出そう、この手紙は、夫に見せない方がよいが、見せることが義務だとお考えになるなら、私の性格理解の為に役立たないものでもありますまい、自分のそうした性格を学ぶ為に、私自身楽しい年月をすごして来たのだからと書き送っている。ユーモアをたゞえながら、彼女の心の真率さ、自己認識の熱意の程がうかがわれる。又、Gerald の前で、Craddock が模範的な人格者で、決断的、しかも道徳的、廉直で、誠実、健康で、典型的な英国人で、とても偉いと感じ、好きにならなけりやならないが、好きになれないのは、根性まがりのせいだろうとのべ、又、ジェラルドが、あなたは慈悲深い人であるという、手をふりながら、女というものは生れつき底意地が悪くて、量見が狭いもの、慈愛深いらしい人がいたら、その女自身が、慈愛をとっても欲しがっている証拠だと否定する。このような態度が、ミス・リイの毒気をうすめ、好ましい人物に感じさせる所以である。更に彼女をグロテスクにせず、立体的な、生きている性格に仕立てている要素として考えられるのは、彼女が、彼女の透徹せる論理の毘にひっかゝったり、その冷静な眼が曇ることもあるという、人間通有の弱みを露呈する所であろう。彼等の結婚半年後に、エドワード夫妻のたつての要請で、腰を上げたリイ女史が再び、コート・リイズを訪れて、その結婚生活に分析の目を放ち、結局、結婚生活に、バラの花びらがまかれていないことに気づく。それで、すぐ脳裡をかすめたことは、Dr. Ramsay が、早速、飛んで来て彼女の見込み違いをなじるだろうということだったが、実際会って見ると、

彼女を笑う所か、彼が誤っていたことをみとめ、さぞや満足であろうといわれて、彼女は当惑して、Ramsay の底意が分りかね、からかわれているのではないかと、困惑してしまうのである。このことは、自己の論理を追うに余りに急なる為から出来た、不覚であり、彼女も人の子であることを示す一例と思われる。鋭い眼も曇ることのあるという例は次の例である。バーサとジェラルドの間を、バーサのあからさまの愛の言葉を聞いても、疑わなかったことである。勿論、モームはこの事に対して、ミス・リーの為に、あからさまに事実をぶちまけることは、人の目をくらます最上の策であり、それが、無意識に語られた場合はなおさらであり、五十才前後の女性は、二十五才をすぎた同性を見さかいなく自分と同年輩に見立てる習性があるのだと弁じている。しかし、Gerald が、いとまごいに来た時、バーサが頭痛を理由にパーティを欠席する旨を告げた時に、いささかの疑いもはさまず、一人でのこのこと出かけたことは、彼女にして千慮の一失ともいうべきことであったと思われる。会半ばにして、たぶらかされたことに気が付き、跼足で室内に飛びこんで来たあわてぶりの一幕は、まことに喜劇的であり、ほゝえましい。尚、彼女の魅力的な特徴として、忘れられぬことは、人の為には出来るだけのことをしてやろうという暖かい善意にみちた心づかいである。ジェラルドが、女中といざこざを起して、母親は、その不良の我が子をアメリカに送る前、一ヶ月の生活を頼みこむと、喜んでそれを引受けもしたし、亦、前々から、父親と喧嘩して彼女の所に来れば暖かい皮肉さで、——この金の使途は、言ってくれるな、聞けば文句がいくたくなるだろう、しかし、もっと入用だったら、又おいでなさい——5ポンド与えているのである。(悪人好みモームのシニカルな一例証である。)又、Dr. Ramsay (彼女の輕蔑的) が、エドワードが、バーサの結婚相手として適当でないという時、反対をつづけて来たミス・リーは、彼の後見人としての立場のつらさを察して、こんな不景気な時代には、お百姓にとってたゞ一つ頼みに出来る方策は、女地主と結婚することでしょうかと、救いに出る。彼等の結婚生活半年後に招かれて、一週間滞在して、帰りしなに、も早、二人の間の不和を察して、もし、ロンドンに買物に来たくなったら、いつでも泊めて上げます

と、いつになく、優しい言葉をバーサにかけるのだが、その裏には、いつでも困った時は、あなたの親しい真実の友として、私のいることを忘れるなという気持を伝えたかったのである。喜怒哀楽をあらわに出すことの出来ないこの種のタイプの女性の最大級のやさしい心のあらわれであったのである。人は皆、自分の信条を守って、自分の道を開拓すべきだとする彼女は、二人の完全な不和の後、バーサとローマで一緒に滞在していても、その間、エドワードの名は絶対に口に出さず、何も感づいていないふりをし、「賢い女にとって、一番むづかしいことは、自分が愚物であるふりをすることだ」との逆説を忘れない。復活祭がすぎて、ロンドンのシーズンを楽しみ、オペラでも見るかとロンドン行を提案するが、コート・リイズには行かないことにしようと、バーサの心を察し、「申しわけないことに、エドワードに泊ってもらう部屋がない、とても狭くてね」と皮肉をとばす。モームの皮肉ということとは、敵をやんわりとたく武器であるらしい。彼の言によれば、皮肉は、神が与えてくれた才能であり一切の話法の中で最も精妙なものである。即ち、甲冑であり、武器であり、哲学であり、永遠の楽しみである。才智にうえた人には食物となり、笑いに渴いた人には飲料ともなる。敵対者を諷刺 (sarcasm) の斧で虐殺し、罵詈の棍棒で殴打したりするよりも、皮肉 (irony) のバラで止めをさす方が、どれだけ優雅であることか。皮肉の達人は、自分だけが、その意味を知っている時に、皮肉の効用を楽しみ味わっているものであり、遅鈍なすべての人たちが、彼の言葉を額面通りに受け取る時、内心ひそかにほゝえむというのである。モームはシニカルという世間の評価に反対して、悪人だけを称揚しているのではなく、人間の善意に目をつむるものではない、悪人の中の善の方が、一層光って見えるものであると (*The Summing Up*, XVII) のべているが、彼にとって善なるものが、信じられる唯一の価値であるとする彼の価値観と、又、小説中に現われる善意の人々へのモームの憧憬とをにらみあわせて、モームのこの特質が、分身たるミス・リイに自ら反映していることは疑いない所であろう。このような皮肉的な見解は、彼が、諧謔のセンスの持主であることの証左であろう。人間は善い事をするよりも、悪いことをする傾向にあると考えるのが、皮肉的な

見方であるならば、それは、人がヒューマーのセンスを持つ者の払わねばならぬ代償であるからである。「他人を笑う時には、怒りは含まれない。ヒューマーは、寛容を教えるものであり、ヒューマーの所有者は、微笑と、おそらくは溜息と共に、他人を批難するよりは肩をすくめるのである。(この動作は、彼の作品でいかにくり返されることか)。彼は道德をとかない。理会することに(筆者)満足している。この理解することは、あわれみ、そして赦すことである。モームは残忍であり、シニカルであるとしても、このような傾向が底に流れている(4)ことを見忘れてはなるまい。

註

- (1) K. G. Pfeiffer, *Somerset Maugham*, P. 43.
- (2) Preface to *Mrs. Craddock*, The Collected Edition.
- (3) *A Writer's Notebook* P. 12.
- (4) *The Summing Up*, XX.

V

愛の死のテーマは、悲劇を意味しない。それには compensations がある。⁽¹⁾愛の業火に、身をさらし、最後には、それから脱して、静穏の境地に達するのである。こゝに彼のほのかなオプティミズムを感じるのである。しかも、このようなテーマは、彼が好んで用いる所である。バーサと同じケースで、理性ではどうしようもない愛欲のうずまきにまきこまれるが、最後には超克した Kitty を主人公にした、“The Painted Veil”に於ても、そうであるし、『人間の絆』のフィリップにせよ、最後には静かな、平凡な、落ちついた結婚生活に入るのである。あらゆる絆を脱して、初めて自己を知り、人生に或悟りを開き、再出発する人々を描きつづけたのである。これは、とりも直さず、あの有名な人生模様のモームの人生観につらなる。人生は無意味であり、まさに生きるに値いしないが、虚無に落ちず、人生模様を完成する為に生きて行かねばならぬとする。これは、たしかにあって医学生であったモームの人生に与えた処方箋である。若いモームは、自分の周囲の美とか、生命とかの、うつろい易いものを、自分

の及ぶかぎり、楽しみ、味わおうと努力したのだ。「若さと、心労とは相容れないものであり、この生きている世界の驚異を、腕をさしのべて、我が胸にだきしめようとしている中に、すべてが、はかなく終ってしまわねばならぬ運命にあるという恐しい思いが追い払われて行くのである。死は厭わしいもの、生はいつも意気揚々として感ぜられる。バラも、ヒアシンスも、人間の朽ち果てた所から花を咲かせるのである。人間が消滅して行くことは、只々次の誕生の合図でしかなく、世界は美しく、常に新らしく、その活力を楽しみ、味わいながら進んで行くのである。」若さだけが、すべてをバラ色に彩らせるわけではない。⁽²⁾一度苦難にさいなまれても、やがては、それに慣れ、悲哀も忘れ、この世は再び生きるに価いすると思うのが人間という生物である。バーサは、ジェラルドとの恋に敗れ、傷心の態で、ユート・リイズに帰って来て、人生は一切の風味を失った、自分の倦怠は果しないものだと思断したが、それはオーバな方であって、人生が思ったより、我慢できることが分って腹立たしくなってくるのである。モームはいう、「人間の魂・心情・心意というものは、一種の楽器であって、無数の曲を奏でることが出来るにしても、そう長い間、一つの曲にばかり、感応し続けることは出来ないのである。どんなに精妙な情感でも、時の流れは、それを鈍らせ、いかに胸をひきさくほどの悲嘆でも、時はそれをやわらげてしまうのだ。人は物事に慣れて行くように出来ていて、いかに、たえ難い倦怠にも、無感覚になり、単調さもたえがたくなり、環境に順応して、人生をさほど退屈なものとも思わなくなる」と。又、読書とか、古典音楽を聞く事の効用をとく。それらは人を人工の樂園にさそい、世のすべてに無関心に⁽³⁾し、愛憎、希望、絶望、野心、情念とかを起さなければ、人生は極めて容易であることを悟らせるとのことである。バーサは、苦悩から逃れるには、死以外にはないと自殺を幾度か考えるが、自殺するには、大きな勇気が必要であることが分り、同時に、かつては、あれ程神を呪った彼女にとっては、不思議なことだが hell-fire への恐怖が障碍となってくる。モームによるとこの怖れは、実に不条理であるが、我々の心にしみこんで、いかに努力しても、理性や論証を発動しても、拭い去ることは出来ず、人間に永劫の罪を負わせる神への恐怖

が依然として我々に残っているのだそうである。これは、又、必然的な死も、も早、自然に肉体が衰弱して、意識を麻痺させてしまうから、何の苦痛も与えないのだということにつらなってくる。自殺することは出来ず、死は苦痛なく迎えられ、時の作用、人間の魂の正常への制御作用、人間の発明した慰め事で苦しみも、不安も忘れることの出来る可能性、人間は放っておいても善に向う⁽⁴⁾という人間性への信頼感、(ミス・リーの、バーサに対する判断)、それらは更に、ミス・リーの次の言葉から推測出来る、モームの実際性、常識性⁽⁵⁾によって支えられている。「この世の中では、どうすれば、よいのかを知るのは、とてもむづかしい。人はよく善と悪とを区別しようと焦るけれど実は、それは多くの場合、似たりよったりのものだ。世間にはよく、何の疑いも持たず十戒を守ること満足じきって、自分の身の処し方を正確にわきまえ、天国への希望と釘拔を手にした蹄の割れた悪魔への恐怖とにしっかり支えられている人がいるけど、私はそういう人をととても幸福な人だと思っている。『汝すべからず』に対し『なぜ』と答える私達は、ユムパスなしで冬の海に行く船乗りみたいなものなのだ。理性と本能とがこうだというと、因襲はそうじゃないと言う。こゝで一番いけないことは、人間の心が十戒で育てられ、地獄の劫火で養われていて、しかも、そうした良心の言葉が最後の断定になっていることだ。この点を考慮に入れておくことは、そりや卑法かも知れないけれど、でもたしかに思慮あることだと思う。(中略)世間一般の見方に反抗して進む為には、かなり強い自信が必要になるものだ。もしそれ程の自信がないのだったら、そんな危険を冒すことはしないで、世間の人が歩くのと同じ安全な道を行った方が得策だと思う。それは別にすばらしいこともなく、雄々しくもなく、退屈きわまる道である。でもそれは安全な道である」自殺の時にものべたように、又、上述のように、十戒に疑問を抱き、反問⁽⁶⁾する生き方は、実に危険であり、安全に生きるには、理性とか、本能とかではどうしようもない現実の流れにまかせねばならぬということに落つている。生活派モームの当然の帰著である。この言葉は、ミス・リーが、失意のバーサに人生の極意を伝授したようなもので、本作品中、最後に発せられたものだけに、印象的でもあり、モームの生き方の本心

をのぞかせているように感ぜられる。彼の脊景には、常に深淵然となって現実が控えている。現実暴露は彼の得意である。この深淵を警戒するモームの常識性を欠陥とし、作家としての限界をなすのではないか、というような問題はさておいて、彼がシニカルであり、不可知論者だと論じても、この常識性が彼の人生模様をいささかの破綻もなく維持している源泉であることは明白である。パーサが夫の死後、人間の孤独を新たに認識し、慰めを見出し、読書し始めるという結末は、以上のような常識性にきゝえられた一種の楽天観の自らの帰趨ではあるまいか。

(7)

註

(1) K. G. Pfeiffer, *Somerset Maugham*, P. 41.(2) *Mrs. Craddock*, XXVII.(3) *Ibid.*, XXXIV.(4) *The Summing Up*, XXXIII.

「生命力とは強いものである。それに伴う喜びは人間が直面する苦痛や辛苦のすべての埋合わせをする。それは、人生を生きる価値あらしめる。なぜならば、それは内部から作用し、その明るい焔で、各人の還境を照らすのでいかに耐えがたいことをも、なおかつ耐え得るように思わせるからである。」

(5) *Mrs. Craddock*, IV.(6) *Ibid.*, XXXIII.(7) *The Summing Up*, LXXIII.

「我々が、文明化されていると呼びならわした国々で、現在でも、人々が互いに相手を扱っている冷酷さを見る時、彼等が昔より、いくらかよくなっているというのは性急であろうが、それにも、かゝわらず、大体において、世界は、歴史が、我々の前に並べてくれる過去の世界よりも、住み良い場所になっているし、現在も悪くはあるが、大多数の人は、昔ほどひどくないと考えることは、必ずしも迷妄でないという気がするし、知識の増大、多くの残酷な迷信や使い古された因襲の追放、もっと強い、愛情ある心優しさをもつてすれば、人々がうける多くの悪も除かれるだろうという希望を持っても、不合理ではないだろう。」